

細胞診を学ぶ人のために 第5版

坂本穆彦 編

＜書評者＞ 畠山重春（サイバソリサーチセンター代表取締役）

『細胞診を学ぶ人のために 第5版』〈通称“学ぶ君”〉が、初版の発売された1990年からおよそ21年目となる今年、刊行された。本書は20年以上続くロングセラーである。約20年の間に何人の細胞診をめざす技師、医師が“学ぶ君”の世話になったのであろうか。

この第5版では新たな執筆陣も多く加わり、まさに時代の流れとともに細胞診への応用範囲が多岐にわたることを裏付ける陣容となっている。目次を見て、細胞診の概論（第1章）に始まり、細胞の基本構造、基礎組織学、病理組織学分野と続き、その後の標本作製法や染色法、顕微鏡操作法、およびスクリーニング技術までの総論部分すべてが、細胞検査士ではなく細胞診専門医が執筆担当していることにふと気づいた。これには若干の戸惑いを覚えたが、興味を引いたのは免疫染色の記述である。細胞診においても免疫染色の応用が不可欠になっている現状に対応し、抗体の入手と保存に関する注意までが細やかに記され、免疫染色を試みる初心者の陥りやす

い基本的事項までもが簡潔に記載されている。細胞検査士資格認定試験、あるいは細胞診専門医試験に挑む者にとっては確かに“学ぶ君”である。

一方、婦人科領域の細胞診（第9章）から、呼吸器、消化器、泌尿・生殖器、乳腺・甲状腺、体腔液・脳脊髄液、非上皮性組織の細胞診（第15章）までの細胞診断学各論はすべて現役の細胞検査士によって執筆されているのには驚きとともに、1人の細胞検査士として誇りを感じた。編集者の坂本穆彦先生が、第一線で細胞を見ている細胞検査士を、いかに高く評価されているかを垣間みたような印象である。

また、本書は実際の細胞写真も多いが、初学者の理解を深めるためであろう細胞の特徴を表現した説明図がこの第5版からはカラー化され随所で示されていることから、執筆者の思い入れが伝わってくる。

婦人科頸部細胞診ではベセスダシステムが一般化の兆しをみせている今日、初めて本格的に細胞診を勉強する人向けの教科書とし

て、本書の果たす役割、その責任も重いと思うが、実に理解しやすく詳細かつ簡略に解説され、重責を見事にはたしている。本書後半の各論部分を執筆している技師は、全員が癌専門病院において現場の第一線で活躍する“細胞を読むエキスパート”であるのみならず、みずから研究も行い、さらに細胞検査士養成のための教育にも携わっているプロ中のプロ集団である。この執筆陣の支えによって、簡略表現にもかかわらず奥深さを感じさせ、他の追随を許さない内容構成になっているものと確信できる。

細胞検査士を目指す技師、学生のみならず、細胞診専門医を志す医師にとっても、細胞診とはなにかということを理解するうえで最初の一步を踏み出すきっかけになる本として、自信を持ってお勧めできる教材である。同時に、ベテラン技師、専門医にとっては、新しい表現、細胞の見方を再確認する参考書としても有用な、価値ある一冊としてぜひとも手元に置いて日々活用されることを望む次第である。

●B5 頁392 2011年
定価10,290円
(本体9,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01185-3]
医学書院刊